

「A」から「ZEN」へ

文： ラウラ・サヴィーニ

アンナ・マリアの体験。フィレンツェの家、二人の子ども、家族が経営する修復会社。坐禅を発見し、日本へのスピリチュアルな旅を決行。この旅行が彼女の人生を変えることになる。いまは真如という名の僧だ。

昨日までは、家族の修復会社で働く、カールした金髪の美しいフィレンツェ在住の女性、アンナ・マリア・マッラーディだった。父親が違う二人の子どもは、女手一つで育てた。アンナ・マリアはいま、真如と名乗る僧である。真如とは、事物の本質を見抜く技を日々の生活のなかで証しだてる、という意味。仕事は続けているが、二年前フィレンツェにつくられた禅寺の管理を任されている。男性のような短い髪も、日本の師のもとを訪ねるときには、仏教の修行僧がするように剃りおとす。そんな真如が『ジョイア』誌に自分の変化を語ってくれた。これまで歩んできたのとはまったくちがう人生を選択した経緯とは…。

あるとき、自分がもう微笑むことができず、嘲るような笑い方しかできないことに気がついたのです。自分の身を守るために周囲にバリアを張るように、仮面を被っていました。でも、何から身を守るために？自分自身から？自分のことをもっと知らなければならないと思いました。こうして、坐禅をはじめました。続けていくうちに、もっと奥まで突きとめてみたいと思うようになりました。こうして、わたしは変わりをはじめました。でも、最初はそのことに気がつきませんでした。ほんとうの変化は、いつもそうなんですね。周囲の物事まで変わりはじめていたのに、それにも気がつきませんでした。最初は、自分のはじめた精神的な歩みが、毎日の用事の上に積み重なっていくようにしか思えませんでした。坐禅に重荷を感じ、何かを掴まなければならないと思うようになりました。恋愛でも苦しみました。長い間、師を探しもとめていました。でも、ほんとうは、父がほしかったのです。そのことがわかったのは、自分のほんとうの師に出会ったとき、まさに父親探しをやめたその瞬間でした。ある日、ミラノ行きの列車のなかで、フィレンツェに引っ越すという男性と知り合いになりました。彼は日本の僧の孫でした。長年待ちつづけてきたチャンスをたずさえて、運命が彼をとおしてやってきたんです。端折って話すと、わたしはこの人と親しくなり、金沢の禅寺、大乘寺で修行する特別の許可をもらいました。2002年の8

月でした。わたしは男性ばかりの、英語を話す人が一人もない禅寺で、唯一の女性として、一言の日本語もわからない状態で修行をはじめました。近くに住む、お茶の先生をしている女性の家に泊めてもらっていました。自分が場違いな人間のように、周りから浮いていると感じることもしばしばありましたが、「わたしはここ何をしてるんだろう」と自問することは一度もありませんでした。当時、副山主であった東隆眞老師にはじめて会ったときから、くつろいだ気持ちになることができました。でも、悟りは、イタリアに帰るその日になってやってきました。東隆眞老師に別れのあいさつをするときになって、わたしは泣きじゃくりはじめ、自分でコントロールができないほどでした。とても強い感情でした。自分のほんとうの師が誰であるか、やっとわかったのです。老師はわたしに、「また近いうちに会いましょう」と言ってくれました。

フィレンツェに帰ってからわたしは老師に手紙を書き、連絡を取りつづけました。そして、2004年、ふたたび大乘寺を訪れました。この間に老師は山主になり、二ヶ月の修行の後、わたしを僧として認めてくださいました。師をもつということは、「跡を残さず歩む」ために導いてくれる人の存在を意味します。わたしは、自分を勇気づけてくれる人を必要としていました。また、自分が一人ぼっちではないことを理解する必要がありました。老師によって、わたしは自分の歩むべき道を見つけ、信仰を確かなものにしました。「得度式」と呼ばれる僧になるための儀式を行うために、わたしに与えられた課題はやさしいものでした。そして、曹洞宗と呼ばれる仏教の一宗派に属することになったのですが、カトリックを放棄する必要も、自分の生活を何ひとつ変える必要もありませんでした。それどころか、東隆眞老師が言うように、わたしが優先してしなければならないことは、まだわたしのことを必要としている、小さい娘の面倒を見ることでした。働くこともできます。そして、勉強と修行を怠らないこと。日常生活においては、人々の救済へつながる菩薩への祈りをかかさず行い、人々を苦しみから解放する手助けをし、万物を律する法と調和して生きるようにつとめます。老師によって、わたしは「サンガ（修行者の共同体）の門番」という任務を与えられましたが、寺に入るときにも僧服は着ませんし、他人に上から助言する人特有の作ったような笑顔も浮かべません。わたしは傷つきやすい人間であることを隠さず、転んだら立ち上がることを、そして、わたし自身のままでいることを選んだのです。こうして、わたしは同情と仏の慈悲を知り、他人をゆるせるようになりました。人生には思うように行かないことがあります。禅によって、ここにとどまることを、つまり、策略を巡らさず、「これでいいのだ」と言うことをわたしは学びました。運命論者のように見え

るかもしれません。しかし、このことから自由になることを、わたしたちは「達観」と呼び、豊かさであると考えます。西洋では、たいへんな苦勞をして畑を作り、その畑が計画どおりにいかなかったらどうしよう、と人々は心配します。しかし、思ったとおりに物事が進まなくても、それをそのものとして受け入れることによって、わたしたちは自分自身に対して開かれ、たがいを愛しあい、平和を築くことができます。これが、世界と調和して生きる、ということなのです。

最後にひとつ質問。もし、自分で選ぶことができるとしたら、禅を選びますか、それともしあわせな恋愛を選びますか？真如は笑って答えた。「わたしはいま喜びに満ちています。たしかに、恋愛に対する思いはわたしのなかにいつもあります。でも、自由な時間すべてを坐禅にささげるような女性を選ぶ男性がいるかしら？いるとしたら、お坊さんだけ…」。

写真キャプション

[87 ページ] 上、改宗後の真如、東隆眞老師とともに。

左、得度式前の真如と二人の僧。

[88 ページ] 左、アンナ・マリアの得度式。真如という名前をもらい、師である大乘寺の東隆眞老師によって禅僧としてみとめられる。

左下、得度式前の髪の長い真如。中と右、大乘寺での生活の一コマ。他の僧とともに托鉢の器をたずさえて。